

2 月	豊川 愛護モニター報告	モニター区間	豊川：左右岸 6.2km～17.8km 管轄出張所：豊川流域治水出張所
実施日		実施区間	吉田大橋～賀茂橋

堤防道路の高さはせいぜい5 m程度しかないのだが、わずか数mしか離れていない堤防の両側では山の表裏ほどの大きな環境の違いが発生する。堤防の南側斜面は冬の低い太陽光が垂直に近い角度で地面を照らす一方で北側斜面ではその逆で太陽光を十分に浴びることができない。しかも、北側は容赦なく冬の季節風が吹きつけるため、地面の温度はかなり低くなる。しかし、南側は堤防が風よけの壁になるため、冬の季節風がかなり弱められ上に、より強い太陽光と相まって地面の温度は比較的高い状態になる。

2枚の写真は2月9日、この冬最強クラスの寒波が到来した日のもの。最低気温が氷点下となったこの日、堤防北側の日陰になっている法面ではごらんのように霜が覆い、真冬の厳しさを思わせる風景になっている。一方わずか2 kmも離れていない堤防南側の法面ではタンポポが花を咲かせ、春の雰囲気を出している。

人間が感じるができない精妙な環境があることをこのような情景は知らせてくれる。



～ヤドリギ～

吉田大橋から賀茂橋の間でふつうに見られる。きれいな球形をした樹形で、見た目になかなか美しい木である。夕陽を背景にしたシルエットにはつい見惚れてしまう。生長速度はそんなに速くなく、一年で一節、数センチしか成長しない。したがって、大きなものは樹齢20～30年の「大木」ということになる。もっぱら落葉樹に着生するので、母体となる木が葉を落とす冬に目立つ。



しかし、このヤドリギ、一本の木に数個生えているぐらいなら、「軒下を借りているだけのつつましい間借り人」という風情なのだが、これだけの数のヤドリギが着生しているのを見ると、まるで「知らぬ間に母屋を乗っ取ったあつかましい居候」のようだ。こうなってくると、木自体が別種の樹木のように見えてくる。これだけのヤドリギにとりつかれてしまうと、母体の木は大丈夫なのだろうかと思ってしまうのだが、ヤドリギにとりつかれて枯れてしま

まった木はこれまで見たことはない。ヤドリギは自身も光合成によって養分を得ることができるので母体の木にそこまでの負担をかけることはないのだろう。

西洋ではヤドリギは神聖な木と見なされ、さまざまな神話が生み出されている。他の樹木に寄生し、独特な樹形で冬の間でも葉を茂らせるヤドリギに何か神秘的なものを感じるのだろう。

